

# Dogen's Zuimonki Japanese Text

Digitization by  
Hyatt Carter

The *Shobogenzo Zuimonki* is a collection of Zen lectures that Dogen presented to the monks who were studying under his guidance at Koshoji Monastery. These lectures, or dharma talks, were recorded by Ko'un Ejo (孤雲懷奘), Dogen's primary disciple and his successor in the Soto Zen lineage. The collection consists of six books with each book divided into a number of sections as listed below:

- Book 1 (21)
- Book 2 (26)
- Book 3 (14)
- Book 4 (16)
- Book 5 (23)
- Book 6 (17)

In these dharma talks Dogen offers his students concrete guidelines for practicing the Way with a recurring emphasis on the importance of seeing impermanence as a key element in the nature of things. Shohaku Okumura, who has translated many of Dogen's writings, said that reading the *Zuimonki* in his youth made such a strong impression that this was one of the reasons he decided to become a monk.

For readers who may wish to juxtapose sections, in a dual-language format, Okumura's English translation of Dogen's *Zuimonki* is available online at:

[http://global.sotozen-net.or.jp/common\\_html/zuimonki](http://global.sotozen-net.or.jp/common_html/zuimonki)

To facilitate ease of comparison, I have arranged the Japanese paragraphs below to correspond to the English translation.

With that said, the first installment — **Book 1** — begins on the next page.

# Shobogenzo Zuimonki 正法眼藏隨聞記

by Dogen Zenji  
道元禪師

## Book 1 1-1

一日示して云く、續高僧傳の中に、或禪師の會下に一僧あり。金像の佛と亦佛舍利とをあがめ用ひて、衆寮等にありても常に焼香禮拜し恭敬供養しき。

有時禪師の云く、汝ちが崇る處の佛像舍利は、後には汝がたぬに不是あらんと。

其の僧らけがはず。

師云く、是れ天魔波旬の作す處なり、早く是を棄つべし。

其の僧憤然として出ぬれば、師すなはち僧の後へに云ひ懸て云く、汝箱を開て是を見べしと。

其の僧いかりながら是を開てみれば、毒蛇わだかまりて臥りと。

是を以て思ふに、佛像舍利は如來の遺像遺骨なれば恭敬すべしと云へども、また偏に是を仰ひて得悟すべしと思はゞ還邪見なり。天魔毒蛇の所領となる因縁なり。

佛説の功德は定まれる事なれば、人天の福分となること生身と等しかるべし。

總じて三寶の境界を恭敬供養すれば罪滅び功德を得、また惡趣の業をも消し人天の果をも感ずることは實なり。是によりて法の悟りを得んと思ふは僻見なり。

其佛子と云は佛教に順じて真に佛位に到る為なれば、只教に隨て工夫辨道すべきなり。其の教に順ずる實の行と云は即今の叢林の宗とする只管打坐なり。是を思ふべし。

## Book 1

### 1-2

亦云く、戒行持齋を守護すべければとて、強て宗として是を修行に立て、是によりて得道すべしと思ふも、亦これ非なり。只是れ衲僧の行履、佛子の家風なれば、随ひ行ふなり。是れを能事と云へばとて、必ずしも宗とする事なけれ。然あればとて破戒放逸なれと云には非ず。若亦かの如く執せば邪見なり、外道なり。只佛家の儀式、叢林の家風なれば、随順しゆくなり。是を宗とする事、宋土の寺院に寓せし時に、衆僧にも見へ來らず。

實の得道のためには唯坐禪工夫、佛祖の相傳なり。是によりて一門の同學五眼房故葉上僧正の弟子が、唐土の寺院にて持齋をかたく守りて戒經を終日誦せしをば、教て捨てしめたりしなり。

懷昇問て云く、叢林學道の儀式は百丈の清規を守るべきか。然あれば、彼れはじめに受戒護戒を以て先とすと見えたり。亦今の傳來相承は根本戒をさづくとも見えたり。當家の口訣、面授にも、西來相傳の戒を學人にさづく。是便ち今の菩薩戒なり。然あるに今の戒經に日夜に是を誦せよと云へり。何ぞ是を誦ずるを捨てしむるや。

師云く、しかなり。學人最とも百丈の規繩を守るべし。然あるに其の儀式は受戒護戒坐禪等なり。晝夜に戒經を誦し専ら戒を護持すと云は、古人の行履に隨て祇管打坐すべきなり。坐禪の時何れの戒か持たざる、何れの功德か來らざる。古人行じおける處の行履、皆深き心なり。私しの意樂を存せずして衆に隨ひ古人の行履に任せて行じゆくべきなり。

## Book 1

### 1-3

有時示して云く、佛照禪師の會下に一僧ありて、病患のとき肉食を思ふ。照是を許して食せしむ。ある夜自ら延壽堂に行て見たまへば、燈火幽にして病僧亦肉を食す。時に、一鬼病僧の頭べの上ののりいて件の肉を食す。僧は我が口に入ると思へども、我は食せずして頭上の鬼が食するなり。然しより後は病僧の肉食を好むをば鬼に領せられたりと知て是を許しきと。

是につゐて思ふに、許すべきか許すべからざるか斟酌あるべし。五祖演の會にも肉食のことあり。許すも制するも古人の心皆其意趣あるべきなり。

## Book 1

### 1-4

一日示して云く、人其家に生れ其道に入らば、先づ其家業を修すべしと、知べきなり。我道にあらず己が分にあらざらんことを知り修するは即ち非なり。

今も出家人として便ち佛家に入り僧侶とならば須く其業を習ふべし。其業を習ひ其儀を守ると云は、我執をすてゝ知識の教に随ふなり。其大意は貪欲無きなり。貪欲なからんと思はゞ先づ須く吾我を離るべきなり。吾我を離るゝには、無常を觀ずる是れ第一の用心なり。

世人多く、我はもとより、人にもよしと云はれ思はれんと思ふなり。然あれども能も云はれ思はれざるなり。次第に我執を捨て知識の言に随ひゆけば、精進するなり。理をば心得たるやうに云て、さはさにあれども我は其事を捨ゑぬと云て、執し好み修するは、彌よ沈淪するなり。

禪僧の能くなる第一の用心は、只管打坐すべきなり。利鈍賢愚を論せず、坐禪すれば自然によくなるなり。

## Book 1

### 1-5

示して云く、廣學博覽はかなふべからざることなり。一向に思ひ切て止べし。唯一事につゐて用心故實をも習ひ先達の行履をも尋ねて、一行を専らはげみて、人師先達の氣色すまじきなり。

## Book 1

### 1-6

或時辨問て云く、如何是不昧因果底道理。

師云く、不動因果なり。

云くなんとしてか脱落せん。

師云く、因果歴然なり。

云くかくの如くならば因果を引起すや、果因を引起すや。

師云く、總てかくの如くならば、かの南泉の猫兒を斬るがごとき、大衆既に道ひ得ず便ち猫兒を斬卻しおはりぬ。後に趙州頭に草鞋を戴きて出たりし、亦一段の儀式なり。

亦云く、我れ若し南泉なりせば即ち云べし、道ひ得たりとも便ち斬卻せん、道ひ得ずとも便ち斬卻せん、何人か猫兒をあらそふ、何人か猫兒を救ふと。大衆に代て云ん、既に道ひ得ず、和尚猫兒を斬卻せよと。亦大衆に代て云ん、和尚只一刀兩段を知て一刀一段を知らずと。

柴云く、如何是一刀一段。

師云く、猫兒是。

亦云く、大衆不對の時、我れ南泉ならば、大衆既に道不得と云て、便ち猫兒を放下してまじ。古人の云く、大用現前して軌則を存せずと。

亦云く、今の斬猫は是便ち佛法の大用現前なり。或は一轉語なり。若一轉語にあらずば山河大地妙淨明心と云べからず。亦即心是佛とも云べからず。便ち此一轉語の言下にて猫兒即佛身と見よ。亦此詞を聽て學人も頓に悟入すべし。

亦云く、此斬猫兒即是佛行なり。

喚で何とか云べき。

云く、喚て斬猫と云べし。

柴云く、是れ罪相なりや否や。

云く、罪相なり。

柴云く、なにとしてか脱落せん。

云く、別別無見なり。

云く、別解脱戒とはかくの如を云か。

云く、然り。亦云く、たゞしかくの如きの料簡、たとひ好事なりとも無らんにはしかじ。

柴問て云く、犯戒の語は受戒已後の所犯を云か、唯亦未受已前の罪相をも犯戒と云べきか。如何ん。

師答て云く、犯戒の名は受後の所犯を云べし。未受已前所作の罪相をば只罪相罪業と云て犯戒と云べからず。

問て云く、四十八輕戒の中に未受戒の所犯を犯と名くと見ゆ。如何ん。

答て云く、然らず。彼は未受戒の者、今ま受戒せんとする時所造のつみを懺悔するに、今の戒にのぞめて、前に十戒等を授かりて犯し、後ち亦輕戒を犯ずるをも犯戒と云なり。以前所造の罪を犯戒と云にはあらず。

問て云く、今受戒せんとする時、まへに造りし所の罪を懺悔せんが爲に、未受戒の者に十重四十八輕戒を教へて讀誦せしむべしと見へたり。亦下の文に、未受戒の前にして説戒すべからずと。此の二處の相違如何。

答て云く、受戒と誦戒とは別なり。懺悔のために戒經を誦するは猶是念經なり。故に未受者戒經を誦せんとす。彼が爲に戒經を説かんこと咎あるべからず。下の文に、利養の爲のゆゑに未受戒の前にして是を説ことを制するなり。今受戒の者に懺悔せしめん爲には最も是を教ゆべし。

問て云く、受戒の時は七逆の受戒を許さず。先の戒の中には逆罪も懺悔すべしと見ゆ。如何ん。

答て云く、實に懺悔すべし。受戒の時許さざることは、且く抑止門とて抑ゆる義なり。亦上の文は、破戒なりとも還得受せば清淨なるべし。懺悔すれば清淨なり、未受に同からず。

問て云く、七逆すでに懺悔を許さば、亦受戒すべきか。如何ん。

答て云く、然あり。故僧正自ら所立の義なり。既に懺悔を許す、亦是受戒すべし。逆罪なりとも、くひて受戒せば授くべし。況や菩薩はたとひ自身は破戒の罪を受とも、他の爲には受戒せしむべきなり。

## Book 1 1-7

夜話に云く、惡口を以て僧を呵嘖し毀訾すること莫れ。設ひ惡人不當なりとも左右なく惡くみ毀ることなかれ。先づいかにわるしと云とも、四人已上集會しぬればこれ僧體にて國の重寶なり。最も歸敬すべきものなり。若は住持長老にてもあれ、若は師匠知識にてもあれ、弟子不當ならば慈悲心老婆心にて教訓誘引すべし。其時設ひ打べきをば打ち、呵嘖すべきをば呵嘖すとも、毀訾謗言の心を發すべからず。

先師天童淨和尚住持のとき、僧堂にて衆僧坐禪の時、眠りを誡しむるに、履を以て打ち謗言呵嘖せしかども、衆僧皆打たるゝを喜び讚歎しき。

有時亦上堂の次でに云く、我れ既に老後、今は衆を辭し菴に住して老を扶けて居るべけれども、衆の知識として各の迷を破り道を授けんがために住持人たり。是に依て或は呵嘖の詞ばを出し、竹篋打擲等のことを行ず。是頗る怖れあり。然あれども、佛に代て化儀を揚る式なり。

諸兄弟慈悲を以て是を許し給へと言ば、衆僧皆流涕しき。此の如きの心を以てこそ衆をも接し化をも宣べけれ。住持長老なればとて、亂に衆を領し我が物に思ふて呵嘖するは非なり。況や其人にあらずして人の短處を云ひ他の非を謗るは非なり。能能用心すべきなり。

他の非を見て惡しと思ふて慈悲を以て化せんと思はゞ、腹立まじきやうに方便して、傍ら事を云ふやうにてこしらふべきなり。

## Book 1 1-8

亦物語に云く、故鎌倉の右大將、始め兵衛佐にて有し時、内裡の邊に一日はれの會に出仕の時、一人の不當人ありき。

其時の大納言おほせて云く、是を制すべしと。

大將の云く、六波羅に仰せらるべし、平家の將軍なりと。

大納言の云く、近か近かなればなりと。

大將の云く、其の人に非ずと。

是れ美言なり。此の心にて後には世をも治められしなり。今の學人も其心あるべし。其人にあらずして人を呵すること莫れ。

## Book 1 1-9

夜話に云く、昔魯仲連と云ふ將軍ありき。平原君が國に在て能く朝敵をたひらぐ。平原君賞して數多の金銀等を與へしかば、魯仲連辭して云く、只だ將軍のみちなれば敵を能く討のみなり、賞を得て物をとらん爲に非ずと云て、敢て取らずと云ふ。魯仲連が廉直とて名譽のことなり。

俗猶を賢なるは我れ其の人として其の道の能をなすばかりなり。かほりを得んと思はず。學人の用心もかくの如くなるべし。佛道に入り佛法の爲に諸事を行じて代に所得あらんと思ふべからず。内外の諸教に皆無所得なれとのみ勧むるなり。

## Book 1 1-10

法談の次に示して云く、設使我れは道理を以て云ふに、人はひがみて僻事を云を、理を攻て云ひ勝はあしきなり。亦我は現に道理と思へども、吾が非にこそと云てはやくまけてのくもあしばやなり。

只人をも云ひ折らず、我が僻ことにも謂はず、無爲にして止みぬるが好きなり。耳に聽入れぬやうにして忘るれば、人も忘れて嗔らざるなり。第一の用心なり。

## Book 1 1-11

示して云く、無常迅速なり。生死事大なり。且く存命の際た、業を修し學を好まば、只佛道を行じ佛法を學すべきなり。文筆詩歌等其の詮なき事なれば捨べき道理なり。佛法を學し、佛道を修するにも、猶を多般を兼學すべからず。況や教家の顯密の聖教、一向にさしおくべきなり。佛祖の言語すら多般を好み學すべからず。一事を専らにせんすら、鈍根劣器の者はかなふべからず。況や多事を兼て心操をとゝのへざらんは不可なり。



## Book 1 1-12

示して云く、昔し智覺禪師と云し人の發心出家のこと。此の師は初は官人なり。才幹に富み正直の賢人なり。國司たりし時官錢をぬすみて施行す。傍人は是を帝に奏す。

帝聞て大に驚怪す。諸臣も皆あやしむ。罪過すでに輕からず、死罪におこなはるべしと定まりぬ。

爰に帝議して云く、此臣け才人なり。賢者なり。今ことさらに此罪を犯す、若し深き心あるか。頸を截るとき、悲み愁へたる氣色あらば速かに截べし。若し其の氣色なくんば定めて深き心あらん、截べからずと。

敕使引去て截んとする時少も愁る氣色なし、還て喜ふ氣色あり。自ら云く、今生の命は一切衆生に施すと。

敕使驚き怪て帝に奏聞す。

帝云く、然り、定て深き心有ん、此事あるべしと兼て是を知と。

依て其志を問。師云く、官を辭して命を捨て施を行じて衆生に縁を結び、生を佛家に受て一向に佛道を行せんと思ふと。

帝是を感じて許して出家せしむ。故に延壽と名を賜ふ。殺すべきをとむる故なり。

今の衲子も是らほどの心を一度發すべきなり。命を輕じ衆生を憐む心深くして身を佛制に任せんと思ふ心を發すべし。若し先きより此の心一念も有らば失なはじと保つべし。是れほどの心、一度おこさずして佛法を悟ることは有べからざるなり。

## Book 1 1-13

夜話に云く、

祖席に禪話をこゝろへる故實は、我が本より知り思ふ心、次第次第に知識の詞ばに隨ひて改め所具所具もて行なり。

假令佛と云は、我が本より知たりつるやうは、相好光明具足し説法利生の徳ありし釋迦彌陀等を佛と知たりとも、知識若し佛と云は蝦蟆蚯蚓そと云はゞ、蝦蟆蚯蚓を是ぞ佛と信じて日比の知解を捨つべきなり。此の蚯蚓の上に佛の相好光明、種種の佛の所具の徳を求むるも猶情見あらたまらざるなり。只當時の見ゆる處を佛と知なり。若し此の如く詞に隨て情見本執をあらためて行かば自ら契ふ處ろあるべきなり。

然あるに近代の學者、自らの情見を執し己見を本として佛とはかふこそあるべけれと思ひ、亦吾が存ずるやうに差へばさはあるまじいなど、云て、自らが情量に似たることやあらんと迷ひありくほどに、大方佛道の精進なきなり。

亦身を惜まずして百尺の竿頭に上りて、手足を放て一步を進めよと云ふ時は、命ちありてこそ佛道も學すべけれと云て、眞實に知識に隨順せざるなり。能能思量すべきなり。

## Book 1 1-14

夜話に云く、世間の人も衆事を兼學していづれも能くせざらんよりは、只一事を能くして人前にしてもしつべきほどに學すべきなり。

況や出世の佛法は、無始より以來修習せざる法なり。故に今もうとし。我性も拙なし。高廣なる佛法にことの多般を兼ねれば、一事をも成すべからず。一事を專にせんすら、本性味劣の根器、今生に窮め難し。努力學人一事を專らにすべし。契問て云く、若し然らば何ごといかなる行か、佛法に專ら好み修すべき。

師云く、機に隨ひ根に順ふべしと云へども、今祖席に相傳して專らする處ろは坐禪なり。此の行、能く衆機を兼ね上中下根ひとしく修し得べき法なり。我れ大宋天童先師の會下にして此道理を聞て後ち、晝夜に定坐して極熱極寒には發病しつべしとて、諸僧しはらく放下しき。我れ其の時自ら思はく、設ひ發病して死すべくとも、猶只是れを修すべし。病ひ無ふして修せず、此の身をいたはり用ひてなんの用ぞ。病ひして死せば本意なり。大宋國の善知識の會下にて修し死に死してよき僧にさばくられたらんは、先づ勝縁なり。日本にて死せば、是れほどの人に如法佛家の儀式にて沙汰すべからず。修行していまだ契悟せざらん先に死せば、結縁として生を佛家

に受くべし。修行せずして身を久く持ても詮無きなり。なんの用ぞ。況や身を全ふし病ひ起らじと思はんほどに、知らず亦海にも入り横死にもあはん時は、後悔いかん。

此の如く案じつゞけて、思ひ切て晝夜端坐せしに、一切に病ひ發らず。今各も一向に思ひきりて修して見よ。十人は十人ながら得道すべきなり。勸先師天童の勸めかくの如し。

## Book 1 1-15

示して云く、人は思ひ切て命をも棄て、身肉手足をも截ことは、中々せらるゝなり。然れば世間の事を思ふに、名利執心の爲にも多くかくの如く思ひ切なり。

只依り來る時に事に觸れ物に隨て心品を調ふること難きなり。學者身命を捨ると思ふて且くおしゝづめて、云ふべきことをも修すべきことをも、道理に順ずるか順せざるかと案じて、道理に順せば云ひ若は行じもすべきなり。

## Book 1 1-16

示して云く、

示して云く、學道の人衣糧を煩ふこと莫れ。只佛制を守て、世事を營むこと莫れ。佛の言く、衣服に糞掃衣あり、食に常乞食あり。いづれの世にか此の二事の盡ること有ん。無常迅速なるを忘れて徒らに世事に煩ふこと莫れ。露命の且く存せるあひだ、佛道を思て餘事をことゝすること莫れ。

有人問て云く、名利の二道は捨離し難しと云へども、行道の大なる礙りなれば捨てずんばあるべからず。故へに是を捨つ。衣糧の二事は小縁なりと云へども行者の大事なり。糞掃衣常乞食は是れ上根の所行、亦是れ西天の風流なり。神丹の叢林には常住物等あり。故に其煩ひ無し。我が國の寺院には常住物なし。乞食の儀も即ち絶て傳はらず。下根不堪の身、いかゞせん。然らば予が如きは、檀信の信施を貪らんとするも、虚受の罪隨ひ來る。田商土工を營むは是れ邪命食なり。只天運に任せんとすれば果報亦貧道なり。飢寒來らん時、是を愁ひとして行道を礙へつべし。

或人諫めて云く、爾が行儀はなはだし、時を知らず機をかへり見ざるに似たり。下根なり。末世なり。かくの如く修行せば亦退轉の因縁となりぬべし。或は一檀那をも相かたらひ、若は一外護をもちぎりて、閑居靜處にして一身をたすけけ、衣糧に煩ふこと無く靜に佛道を行はずべし。是れ便ち財物等を貪るに非ず。暫時の活計を具して修行すべしと。

此の詞を聞くと云へどもいまだ信用せず。かくの如きの用心いかん。

答て云く、但夫れ衲子の行履、佛祖の家風を學ぶべし。三國ことなりといへども眞實學道の者いまだ此の如きの事あらず。只心を世事に執着すること莫れ。一向に道を學すべきなり。佛の言く、衣鉢の外は寸分も貯へざれ、乞食の餘分は飢たる衆生に施せ、設ひ受け來るとも寸分も貯ふべからず。

況や馳走あらんや。外典に云く、朝に道を聞て夕べに死すとも可なりと。設ひ飢へ死に寒へ死すとも、一日一時なりとも佛教に隨ふべし。

萬劫千生、幾回か生じ幾度か死せん。皆な是れ世縁妄執の故へなり。今生一度佛制に隨て餓死せん、是れ永劫の安樂なるべし。いかに況や未だ一大藏教の中にも三國傳來の佛祖、一人も飢へ死にし寒へ死にしたる人ありときかず。世間衣糧の資具は生得の命分ありて求に依ても來らず、求ざれども來らざるにも非ず。只任運にして心に挾むこと莫れ。末法なりと謂ふて今生に道心發さずば、何れの生にか得道せん。

設ひ空生迦葉の如くにあらずとも、只隨分に學道すべきなり。外典に云く、西施毛嬙にあらざれども色を好む者は色を好む、飛兔綠耳に非ざれども馬を好む者は馬を好む、龍肝鳳髓にあらざれども味ををむ者は味を好む。只隨分の賢を用るのみなり。俗なを此の儀あり。佛家亦かくの如くなるべし。

況や亦佛二十年の福分を以て末法の我らに施す。是に依て天下の叢林、人天の供養絶へず。如來神通の福德自在なるも、馬麥を食して夏を過しましき。末法の弟子、豊に是を慕はざらんや。問て云く、破戒にして虚く人天の供養を受け、無道心にして徒に如來の福分を費やさんよ在家人に隨ふて在家の事をなして、命ながらへて能く修道せんこと如何ん。

答て云く、誰か云ひし破戒無道心なれと。只強て道心を發し佛法を行すべきなり。いかに況や持戒破戒を論ぜず、初心後心を分かたず、齊しく如來

の福分を與ふとは見へたれども、破戒ならば還俗すべし、無道心ならば修行せざれとは見へず。誰人か初めより道心ある。只かくの如く發し難きを發し、行じがたきを行ずれば、自然に増進するなり。人々皆な佛性あり。徒づらに卑下すること莫れ。

亦文選に云、一國爲一人興、先賢爲後愚廢と。言ふこゝろは、國に賢者一人出來れば其の國興る、愚人ひとり出來れば先賢のあと廢るゝなり。

是を思ふべし。

## Book 1 1-17

雑話の次でに云く、

世間の男女老少、多く交會姪色等の事を談ず。是を以心を慰むるとし興言とすることあり。一旦意をも遊戯し徒然も慰むるに似たりと云ふとも、僧はもつとも禁斷すべきことなり。

俗猶よき人、まことしき人の、禮儀をも存じげにげにしき談の時、出來らざることなり。只亂醉放逸なる時の談なり。況や僧は専ら佛道を思ふべし。雑語は希有異體の亂僧の云ふことなり。宋土の寺院などには都て雑談をせざれば、其やうなることをも云はざるなり。吾が國も近ごろ建仁寺の僧正存生の時は、一向あからさまにも此の如きの言語出來らず。滅後にも在世の時の門弟子等少々残りとゞまりたりし時は、一切に云はざりき。近ごろ此の七八年より以來、今ま出の若き人たち時々談ずるなり。存外の次第なり。

聖教の中にも、食強惡業令人覺悟無利言説能障正道とありて、只うち出して云處の言ばすら、無利の言説は障道の因縁なり。況やかくの如きの言語はことばに引れて即ち心も起りつべし。最も用心すべきなり。故さらにかくなん云はじとせずとも、惡きことゝ知りなば漸々に對治すべきなり。

## Book 1 1-18

夜話に云く、

世人多く善事を作す時は人に知られんと思ひ、惡事を作す時は人に知れじと思ふに依て、此の心冥衆の心に合はざるに依て、所作の善事には感應な

く、密に作す所の悪事には罰あるなり。是に仍て還て自ら謂く、善事には驗しなし、佛法の利益すくなしと思へるなり。是れ即ち邪見なり。最も改むべし。人も知らざる時に密に善事をなし、悪事を錯りて、後には發露してとがを悔ふ。かくの如くすれば便ち密々になす處の善事には感應あり、露るゝ悪事は懺悔せられて罪み滅する故に、自然に現益もあるなり。當果をも亦知るべし。

爰に有る在家人來りて問て云く、近代在家人衆僧を供養し佛法を歸敬するに、多く不吉のこと出来るに依て、邪見起り三寶に歸せじと思ふ、いかん

と。  
答て云く、是は衆僧佛法の咎にはあらず、便ちチ在家人自らの錯なり。其の故は、假令人目ばかりに持戒持齋の僧をば貴び供養し、破戒無慚の飲酒食肉等するをば不當なりと思ふて供養せず。此の差別の心寔とに佛意にそむけり。故に歸敬の功もむなく感應もなきなり。戒の中にも處々に此の心を誡めたり。僧ならば徳の有無を擇らまず只供養すべきなり。殊に其の外相を以て内徳の有無を決定すべからず。末世の比丘いさゝか外相尋常ならめ處見ゆれども、亦是れにまされる惡心も惡事もあるなり。然る間だ、よき僧あしき僧を差別し思ふこと無ふして、佛弟子なれば貴びて平等の心にて供養歸敬もせば、必ず佛意に契て利益もひろかるべし。

亦冥機冥應顯機顯應等の四句あることを思ふべし。亦現生後報等の三時業のこともあり。是らの道理能々學すべきなり。

## Book 1 1-19

夜話に云く、

若し人來て用事を云ふ中に、或ひは人にもものをこひ、或は訴訟等のことをも云んとて、一通の状をも所望すること出で來ること有んに、其の時我は非人なり、遁世籠居の身なれば、在家等の人に非分のことを云んは非なりとて、眼前の人の所望をかなへずば、實に非人の法には似たれども、其の心中をさぐるに、猶我れは遁世非人なり、非分のことを人に云はゞ人定めてわらく思ひてんと云ふ道理を思ふて、聽かずんば、なを是れ我執名聞なり。

只其の時に望んで能々思量して、眼前の人の爲に一分の利益となるべき事をば、人のあしく思はんことをも顧みずなすべきなり。此のこと非分な

り、わるしとて、疎みもし中をもたがはんも、かくの如くの不覺の知音、中たがはん事何か苦るしかるべき。外には非分の僻事をすると人には見ゆるとも、内には我執を破り名聞を捨つる、第一の用心なり。佛菩薩は人の來て請ふときは身肉手足をも截れり。況や人來て一通の状をこはんに、名聞計りを思ふて其の事を聞かぬは是れ我執深きなり。人々ひじりならず、非分の事を云ふ人かなと、所詮なく思ふとも、我は名聞をすて、一分の人の利益とならば眞實の道に相應すべきなり。古人も其の義あるかを見ゆること多し。我も其の義を思ふて、少々檀那知音の思ひかけざる事を人に申傳へて給はれと云事をば、文み一通遣りて一分の利益を作すは易きことなり。

柴問て云く、此こと寔に然り。たゞし善事にて人の利益とならんことを人にも云ひ傳へんは最ともなるべし。若し僻事を以て人の所帶を取んと思ひ、或ひは人の爲にあしき事を云んをば、云ひ傳ふべきや如何ん。

師云く、理非等のことは我が知るべきに非ず。只一通の状を乞へば與ふれども、理非に任せて沙汰あるべき由をこそ人にも云ひ状にも載すべけれ。請け取て沙汰せん人こそ理非をば明らむべけれ。吾が分上にあらぬ此の如きことを、理を枉てその人に云んことも亦非なり。亦現の僻事なれども我を大事にも思ふ人にて此の人の云んことは善惡たがへじと思ふほどの知音ありて、檀那の處へひがことを以て不得心の所望をなさば、其れを只今その人より所望のことを一往聞くとも、彼の状には、去り難く申せば申すばかりなり、道理に任せて沙汰あるべしと書くべきなり。一切に是なれば彼れも是れも遺恨あるべからざるなり。此の如くのこと、人に對面をもし出来ることにつきて能々思量すべきなり。所詮は事に觸て名聞我執を捨つべきなり。

## Book 1 1-20

夜話に云く、

今ま世出世間の人、多分は善事をなしてはかまへて人に知られんと思ひ惡事を作しては人に知られじと思ふ。是に依て内外不相應のこと出來たる。あいかまへて内外相應し、錯まりを悔ひ、實徳をかくして外相をかざらず、好事をば他人にゆづり惡事をば己れにむかふる志氣あるべきなり。

問て云く、實徳を藏し相を飾らざらんこと、寔とに然るべし。但し佛菩薩は大悲利生を以て本とす。無智の道俗等、外相の不善を見て是を謗り難せ

ば、謗僧の罪を感ぜん。實徳を知らずとも外相を見て貴とび供養せば、一分の福分たるべし。是らの斟酌いかなるべきぞ。

答て云く、外相を飾らずとて即ち放逸ならば亦是れ道理に差ふ。實徳を藏すと云ふて在家等の前にて惡行を現ぜん、亦是れ破戒の甚だしきなり。

只希有の道心者、道者の由を人に知られんと思ひ、身にある失を人に知られじと思へども、諸天善神及び三寶の冥に知見する處なり。夫をば愧ずして世人に貴とびられんと思ふ意ろを誠むるなり。只時にのぞみ事に觸て、興法の爲め利生の爲に諸事を斟酌すべきなり。擬して後に云ひ思て後に行して、卒暴なること莫れとなり。一切のことにのぞんで道理を案すべきなり。念々止まらず、日々遷流して無常迅速なること、眼前の道理なり。知識經卷の教へを待つべからず。只念々に明日を期することなく、當日當時ばかりを思ふて、後日は太た不定なり知り難ければ、只今日ばか存命のほど佛道に隨はんと思ふべきなり。佛道に隨ふと云は興法利生の爲に身命を捨て、諸事を行じもてゆくなり。

問て曰く、佛教のすゝめに隨はゞ乞食等を行すべきか如何ん。

答ふ、然あるべし。たゞし是れは土風に隨て斟酌あるべし。なににても利生も廣く我が行もすゝまんかたにつくべきなり。是らの作法、道路不淨にして佛衣を着して經行せばけがれつべし。亦人民貧窮にして次第乞食もかなふべからず。行道も退きつべく利益も廣からざらんか。只土風をまほり尋常に佛道を行じ居たらば、上下の輩がら自ら供養を作し、自行化他成就せん。

此の如きの事も、時に望み事に觸て道理を思量して、人目を思はず自らの益を忘て、佛道利生の爲に能やうに計らふべし。

## Book 1 1-21

示して云く、

學道の人、世情を捨つべきについて、重々の用心あるべし。世をすて家をすて身をすて心を捨つるなり。能々思量すべきなり。世を遁て山林に隱居すれども、吾が重代の家を絶やさず家門親族のことを思ふもあり。



亦世をものがれ家をもすて、親族境界をも遠離すれども、我が身を思て苦るしからんことをばせじ、病ひ起るべからん事は佛道なりとも行ぜじと思ふも、いまだ身を捨ざるなり。

亦身をも惜まず難行苦行すれども、心佛道に入らずして我が心に差ふことをば佛道なれどもせじと思ふは、心を捨ざるなり。



## Book 2 2-22

因に問て云く、  
On one occasion someone asked,

學人若し自己これ佛法なり、外に向て求むべからずとききて、深く此の言を信じて、向來の修行參學を放下して、本性に任せて善惡の業をなして一期を過さん、此の見解いかん。

“How do you feel about the following view? Upon hearing that one’s own self is the buddha-dharma and that it is futile to seek anything outside of oneself, what if a student were to believe this deeply, give up practice and studying, and spend his whole life doing good and bad according to his nature?”

示して云く、此の見解、言と理と相違せり。外に向て求むべからずと云て、行を捨て學を放下せば、此の放下の行を以て所求ありときこへたり。こね覓めざるにはあらず。

Dogen taught, “In this view, the person’s words and reality are contradictory. Giving up practice and abandoning study because of the futility of seeking anything outwardly, sounds as though something is being sought after by the act of giving up. This is not non-seeking.

只行學もとより佛法なりと證して、無所求にして、世事惡業等は我が心になしたくともなさず、學道修行の懶らきをもいとひかへりみず、此行を以て打成一片に修して、道成するも果を得るも我が心より求めることなふして行するをこそ、外に覓ることたかれと云道理にはかなふべけれ。

Just realize that practice and study themselves are the buddha-dharma. Without seeking anything, refrain from engaging in worldly affairs or evil things even if

you have the mind to do so. Do not think of or hate the boredom of the practice of the Way. Just practice wholeheartedly. Practice without even seeking after the completion of the Way or the attainment of the result. This attitude is in accordance with the principle of non-seeking.

南嶽の磚を磨して鏡となせしも、馬祖の作佛を求めしを戒めなり。坐禪を制するにはあらざるなり。坐はすなはち佛行なり、坐はすなはち不為なり。是れ便ち自己の正體なり。此の外別に佛法の求むべき無きなり。

Through Nangaku's polishing a tile to make a mirror, he was admonishing Baso's seeking to become a Buddha. Still he did not restrain Baso from sitting zazen. Sitting itself is the practice of the buddha. Sitting itself is non-doing. It is nothing but the true form of the Self. Apart from sitting, there is nothing to seek as the buddha-dharma.

English Translation:  
**Shohaku Okumura**

HyC